

令和3年度「小学校区教育協議会－はぐくみネット－」事業・学校元気アップ地域本部事業 合同研修会報告

大阪市では小学校区における「小学校区教育協議会－はぐくみネット－」事業のほか、中学校区においても学校・家庭・地域の組織的な連携のもと、地域社会全体で子どもを育てる「学校元気アップ地域本部事業」を実施しています。これまでは両事業の推進に向け、事業関係者及び事業に関心のある方が、事例などを通して両事業の成果と課題を共有し、教育コミュニティづくりと学校教育支援活動についてともに考え交流する機会として合同実践報告会を開催してきましたが、令和3年度は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、Microsoft Teams を使ったオンライン合同研修会として実施しました。

日 時：令和4年3月25日（金）14：00～16：00

Microsoft Teams を使ったオンライン研修

テーマ：地域学校協働活動について

内 容：・「大阪市の地域学校協働活動について」

大阪市教育委員会事務局生涯学習部担当

・講演「学校と地域の新しい関係」

「ゆめ☆まなびネット」代表 大谷裕美子

・質問への助言

【大阪市の地域学校協働活動について】

今回の合同研修会のテーマは「地域学校協働活動について」で、講演に先立ち地域学校協働活動とはどのような活動を指すのか、また大阪市はどのように取り組んでいるのかについて、大阪市教育委員会事務局生涯学習担当より以下のように説明しました。

変化が激しく見通しの困難な社会情勢下で、学校の課題は多様化・複雑化し、地域の教育力低下や家庭の孤立などの課題もある。また学習指導要領改訂に伴い、学校と社会が連携協働しながら新しい時代に求められる資質や能力を育成し、社会に開かれた教育課程の実現等が求められ、それらの課題に対応して、子どもの育ちを支えていくには、学校・家庭・地域の連携・協働することが必要不可欠で、これらを踏まえて国においては「地域学校協働活動」を推進している。

地域学校協働活動とは、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、学校を核とした地域づくりを目指して、地域と学校がパートナーとして連携協働して行う様々な活動を指す。国は平成29年に社会教育法を改正し、その体制整備を定めて活動の推進に取り組んでおり、より多く幅広い地域住民・団体などによる緩やかなネットワークのもとで、学校や家庭と連携しながら様々な活動に取り組むことを目指している。地域学校協働活動を進めるにあたっては、地域住民で組織された地域学校協働本部といった仕組み作りが必要で、この仕組みと保護者や地域住民が参画する学校運営協議会が連携し機能することが、社会に開かれた教育課程の実現につながる。なお大阪市においては、学校運営協議会の類似の組織として学校協議会がある。

大阪市では地域社会の共有財産である学校を核として、地域社会の中で子どもをはぐくむ教育コミュニティづくりを進めており、小学校区のはぐくみネット事業・中学校区の学校元気アップ地域本部事業が中心的な役割を果たしている。また小学校を拠点とした生涯学習ルーム事業も教育コミュニティづくりに資する取り組みである。

現場の課題としては、活動について地域や学校での認知度が低いこと、人材確保の困難さ、活動のマンネリ化などがある。大阪市では市の教育政策に関する新たな「教育振興基本計画」と、生涯学習に関する「第4次生涯学習大阪計画」が令和4年度からスタートする。これらの計画には地域学校協働活動の推進が明記されており、地域と学校の連携協働を一層進めて、はぐくみネット事業・学校元気アップ地域本部事業の取り組みをさらに充実させ、小学校・中学校において学校のニーズや地域の状況に合わせて継続的・安定的な仕組みにしていくことを目指している。今後ははぐくみネット・学校元気アップと学校協議会との連携、コーディネーター連絡会や研修機会の充実、活動の参考になる事例の収集・共有、事業・取り組みを知ってもらうための情報発信・啓発などに具体的に組み込んでいきたい。

【講演】

「学校と地域の新しい関係」というテーマで、文部科学省総合教育政策局 CS マイスターで、大阪府地域コーディネーター連絡協議会役員、ゆめ☆まなびネット代表の大谷裕美子さんにご講演いただきました。CS マイスターとしてコミュニティスクールについて全国に伝えておられることや、コーディネーターの活動について、次のようにお話しいただきました。

◆ 学習指導要領を知る

コーディネーターは学習指導要領について知ることが大事。学校の先生はこれを目的理念として授業を組み立てている。教育課程の理念として「社会に開かれた教育課程」が挙げられていて「教育課程の実施にあたって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりして、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること」と明記されている。この実現については、学校内だけの、今までのような授業では成立していかず、社会に開かれた教育課程イコール地域に開かれた教育課程と考えるとわかりやすい。



◆ 学校教育に地域が関わることのメリットとは？

・子どもにとって

学びや活動が充実し、自己肯定感や思いやりの心が育つ。防犯防災の対策によって安全・安心な生活ができる。

・先生方にとって

地域の人々の理解と協力を得た学校運営、社会に開かれた教育課程の実現が可能になる。

プログラムを組みやすくなり、地域人材を活用した教育活動が充実する、先生に時間の余裕ができる。先生が楽になるというより余裕ができて、子どもに寄り添う時間ができる。

・保護者にとって

学校や地域に対する理解が深まる。地域の中で子どもたちが育てられているという安心感が持てる。

保護者同士や保護者と地域の人との人間関係ができる。

・活動に協力してくれる人にとって

自分の経験を活かすことで生きがいや自己有用感につながる。

◆ 学校協議会と地域学校協働活動の連動

大阪市は各校に学校協議会を設置していて、学校協議会と地域学校協働活動が連動して動くことが今後は大切になる。学校協議会は自転車に例えると前輪で、様々なことを話し合っ



て決めていく意思決定機関で、子どもたちをどの様に育てるかなどのビジョンや目的を決めるなどする。後輪は地域学校協働活動で、イベント開催や学校への人材紹介などで、自治会や放課後子ども活動も含まれる。諸団体がそれぞれで動くのではなく緩やかなつながりを持って、役割分担をしながら活動する。前輪と後輪をつなぐチェーンに当たるのがコーディネーターの役割。ペダルをこぐのは先生で、サドルに座っているのは子どもたちだが、ただ座っているのではなく何らかの役割を持っているのが良い。ハンドルを持つのは校長先生。校長先生は学校協議会で話し合ったことがぶれてきたときにはハンドルを切って軌道修正もする。地域学校協働活動であまりにもスピードアップしすぎた時には、校長先生がブレーキを掛けて、ゆっくりでいいという指示を出す。それらを支えるアシスト機能が教育委員会との連携になる。財政支援や研修会、制度設計が教育委員会の役割。自転車は電動アシストをつけると坂道を登りやすいように、学校が進んでいくに当たって困難な時には教育委員会のアシストが必要となる。チェーンの部分にあたるコーディネーターは、活動の目的や、子どもたちは将来の私たちの町を作る大切な人材だということを皆に伝え、理解しながら進めていく「つなぎ」の立場である。

◆ 地域学校協働活動 支援から連携協働へ

地域学校協働活動は緩やかなつながり方のネットワークとなる。学校に支援で関わるには専門知識などが要るかもしれないが、そうでない人でもできる協力でボランティアとして参加する。支援から連携協働へ。支援はお願いされて手伝う感じだが、連携協働は当事者として色々なことを考えるイメージ。地域の方が「うちの学校の子」という意識を持つことで、地域愛も育つ。学校にいる時間以外は子どもは地域にいる。学校と地域が一緒になって子どもを育てていくという意識を、地域の皆さんにも持ってもらうようコーディネーターがつなぎ役を進めることが大事。

◆ 目標の共有

地域学校協働活動という自転車の進むべき道を、地域も学校も共有する。

「できる人が できる時に できる事を たのしく」大変だけれどちょっと楽しいこともある、というのがいい。その中で地域にもできる、地域だからこそできる事を見つける。今までは全て学校で賄おうとしていたが、その中には地域だからできる事もある。役割分担はできる。

◆ 地域学校協働活動に必要な3本柱

〈コーディネート機能〉

地域住民等や学校関係者との連絡調整、活動の企画・調整を担う役割など、皆さんが日々やっておられること。

〈多様な活動〉と〈継続的な活動〉

多様な活動とはより多くの地域住民・社会教育関係者、企業・大学等の参画による多様な地域学校協働活動を指し、例えば学校教育活動以外の活動で、地域のフェスタやお祭り、スポーツ少年団の活動などもすべて地域学校協働活動に当たる。学校と地域が一緒にできるもの、例えばゲスト講師、ボランティアで図書館の運営・開放、部活動の外部指導者、登下校の安全見守など。

学校とコーディネーターが相談したり提案したりするが、あくまで提案でそれが実行できるかどうかは次の段階。提案は良いが強引はいけない。学校のプログラムの中にどういう風に入れていくのかは先生が考える事で、時期や方法は相談しながら進める。余裕を持って、人材紹介といった情報提供から始め、継続的・安定的に実施をすること。

◆ 地域学校協働活動推進員（コーディネーター）の役割

コーディネーターの役割には、企画立案・連絡調整・募集確保・情報提供等がある。すべて完璧になると負担が大きく、できるところを見つけていくことが大事。学校の実情やニーズに合わせた企画立案をして提案していく。いろいろな団体や民間企業に連絡したり調整したりするコーディネートを担当することで、先生方に余裕ができる。

例えば中学校の職業体験で、企業や商店との交渉を学校や子どものニーズに沿いながらアクセスして、話をつなぐと子どもたちの選択肢が増え、体験活動の幅が広がる。入り口となる企業との連絡などの調整・協力を担い、中身については先生に任せる。

◆ ボランティア募集・確保

その時だけのボランティアでなく、ほかの時も来たいと思えるような声掛けをする。相手に、こういうこともできるからその時は呼んでね、と言ってもらえることがボランティアの数を増やすことにつながる。今回の大阪市の研修で驚いたのは、こうしたオンラインでの研修に参加できるノウハウを持っておられること。こういうチャンスをもた地域・校区で使ってほしい。皆さんが teams やズームを使うことで連携が取れるようになる。

◆ つなぎ役のコーディネーターに必要な能力

一つ目は聞く力、二つ目は伝える力、三つ目は発信する力を持っていること。コミュニケーションの基本は聞くこと。相手の話を聞こうとサインを出すこと。

地域と学校の間に入るフィルター役・クッション役になる。学校に地域の方が入る際の注意点を伝えたり関わり方を伝えたりするのがフィルター役。クッション役とは、地域から学校へのクレームや保護者の不安等を直接学校にぶつけると、学校は返しにくいのでギクシャクするが、その間にコーディネーターが入って一旦受け止めて学校に伝え、学校の答えもコーディネーターが一旦受け止めてから返す役割で、コーディネーターを核とした学校と地域の信頼関係ができる。

◆ 大谷講師の関わっておられる小学校や中学校での取り組みの中の例。

① 活動中の様子の写真を掲示する、顔と名前と活動が一致する仕掛け。

学校の子どもの目につきやすい所に、地域ボランティアさんの活動の様子を、掲示。写真をめくるとその方のメッセージが読める、という仕掛け。子どもや先生方が自然とボランティアさんの名前を覚え、地域でも会話できるようになった。

② 図書室開放。

読み聞かせの方が図書室ボランティアをしたいと思ったが、蔵書管理が電子化され、パソコン操作が苦手だった。そこで先生の協力を得てパソコン操作の勉強会を開き、参加者は操作方法を習得した。それをきっかけに家のパソコンでも Word などが使えるようになった。

講演の最後に、「地域のたくさんの大人との出会いが、こころ豊かな子どもを育てるきっかけになる。コーディネーターさんは仕事を持っている人もいて、時間的に大変だと思うが、子どもたちの笑顔など、何か楽しみを見つけて取り組んでほしい。」と結ばれました。

【質問と助言】

事前に伺っているコーディネーターの悩みなどについて、先生からお答えをいただきました。

Q：後継者候補・新たなコーディネーター探しについて。

A：後継者探しの課題はどこでも出てくる。プロセスは3段階。まず参加していただく。次は一緒に考えていただく。次に「一緒に運営してみないか」と誘ってみる。自分は辞めて代わってもらうのか、一緒にやっていくのかで変わる。ノウハウを伝えてあとは見守るなどのやり方がいい。大阪府にはコーディネーターの養成講座がある。

Q：事業への若い人の参加が少ないことについて。

A：親子で参加できるものを作っていけばよいのではないかと。中高生を呼ぶのであれば、地域イベントに出店やコーナーを出すなどを依頼する。

Q：学校や地域にはぐくみネット事業が知られていないことについて。

A：管理職以外の先生に知らせてもらえていないというのはよくあること。私は管理職の先生と相談して、年度初めの職員会議で名前紹介・取組の紹介をさせてもらっている。地域への周知は、取組などは回覧でなく全戸配布した。

Q：中学校は地域とのかかわりが薄いことについて。

A：防災の取組で、訓練に地域と中学生と一緒にできるような取り組みを提案。すべての子どもたちが出なくてもいいから、少人数からでも始めるのが良い。ただし、便利遣いをしない。地域の方を学校の先生の便利に使うと、地域の方は協力しなくなる。先生は仕事、地域は無償。逆に地域も地域イベントに教員を出して、というような申し入れはしない。

Q：負担があるということについて。

A：SNS などを利用して、時間を調整する。無理なくできる活動はない。活動はちょっと無理しないといけないが、やりがいや子どもの笑顔や地域の協力などで支えられる。